

土筆

第47号

土筆集

高崎 松島 律子
 困難の立ち向かひたる冬芽かな
 まさに今輝く時と龍の玉
 枯菊や仰ぎ見るのは遠き空

前橋 竹内 友子
 鴨の来ぬ池となりをり冬日満つ
 日当りの小さき董の帰り花
 落日の紅染めて眠る山

前橋 矢沢 春子
 川流れ時も流れる老いの春
 初市の賑はふ街に吾も又
 年賀状受けて心の新たなる

藤岡 細谷 志帆
 初笑腹の底まで解しゆく
 初霜の溶けて呼吸の吹き返す
 うつすらと霜の名残を辿る指

高崎 天田 利子
 年用意いつ入れ替はる母娘
 めでたくも窮屈でありお正月
 山眠る里の生活を懐に

藤岡 岸 まり子
 時雨雲気儘に空を往き交ひて
 積年の夢の叶ひぬ龍の玉
 冬の水真実のみを写しけり

高崎 門倉 博子
 凍土の日陰に耐へてゐる頑固
 朝の日に飛び出しさうな龍の玉
 笹鳴に心の耳をあづけぬし

高崎 福田 信子
 餌台に寒禽のほほゆるみけり
 初明りいらかの波を越えて来る
 虎落笛ポストの距離を倍にする

沼田 林 昭風
 初雪や猫の足跡続く道
 恋みくじ梅の小枝に吊るしけり
 眠りたる街煌々と冬の月

安中 唯野 千代
 裸木のあはひ親しき街の音
 禅寺の庭にほぐれし寒紅梅
 風花や学童館の窓磨く

高崎 並木 秋野
 春着みな小町通りへ流れゆく
 新蕎麦の打ち粉振るたび広がる香
 青空の似合ふ日まぢか梅探る

前橋 成田 圭子
 強風が割り込んで来し日向ぼこ
 着ぶくれてこれが私の影かしら
 凍蝶に今わの刻を重ねけり

高崎 浅田 祥子
 寒牡丹可憐な中に堅固あり
 日向ぼこ邪魔する野禽声高し
 凍雲に囲まれ朝の日の光

藤岡 白石 敏枝
 紅梅の命の色を幹に染め
 重ね着て香を育みし露のたう
 大寒に生みくれし母今日は尚

高崎 中里見 樫
 一斉に大歓声や初日の出
 任地より暁やぶり初電話
 八十路坂踏み出す一步初暦

高崎 田口 莉子
 土の母日の父恋ふる福寿草
 鼻を打つ風にマスクの薄さかな
 日と風に産声あげて梅白む

藤岡 小田 満義
 心底の一隅までも冬の月
 上下は風の意のまま洄るる川
 どおーんどん大太鼓打つ大雪崩

高崎 小林 かな
 石仏の頭巾にまろむ寒雀
 寝返れば肩のうずきし霜の声
 着ぶくれて痒きところにとどかざり

高崎 吉田 鈴江
 早梅を囲みし人の輪に入りぬ
 浮寝鳥覚めて流れに乗りあたり
 寒晴にすすり泣くやに越の風

藤岡 木下 薫
 寒禽にとり残されし枝の揺れ
 線描を空に掲げて枯木立
 しばらくは風のあづかる落葉かな

高崎 佐藤 静子
 水の綺羅せせらぎの音鴨渡る
 凍雲の動く気配も遅々として
 老木に巡りし季節梅一輪

大垣 伊藤 弥生
 お降の松枝うるわし朝かな
 受話器取る小窓に青き夕曇
 普茶料理山茶花の咲く坊の内

高崎 湧井 久恵

平穩なりズムとなりし小正月
荒れ果てし梅林なれど探しゆく
梅探る耐へて咲けよと声をかけ

前橋 角田 房枝

啼き渡る影を落として寒鴉
紅梅の疎にして密の香りあり
喋る間に赤城は雪雲着てしまふ

伊勢崎 青山 麻子

冬帝も息切れのして薄日射す
誰を待つ薔ほどかず冬の薔薇
探梅や心安らく寺の庭

伊勢崎 大澤 和世

探梅や小さな蕾風に舞ふ
大寒にめげずに競ふ空手の子
水仙に顔ほころばせ太子像

伊勢崎 柿沼よしの

静かなる四温の寺領散策す
一時の老いに至福の日向ぼこ
万両の隅に隠れて彩をなす

伊勢崎 笠原 公子

外見もなく着膨れて朝の行
手を打てば影も手を打つ寒詣で
寒行や見えざるものに促され

伊勢崎 小峰 史子

日脚伸ぶたどる民族資料館
凧に研がれし星座軋むなり
日脚伸ぶ会ふ人誰も親しくて

伊勢崎 小林喜代子

菊枯るる笑顔残して母の逝く
天命の歳月果てしそぞろ寒
春隣一步促す風の声

太田 酒井美恵子

大寒を過ぎてやはらぐ日の光
冬薔薇可憐に咲きし頬染めて
垣根越し漏れる光に春近し

太田 高橋 和枝

冬空の流れし雲に夢を乗せ
寒梅のほころぶ姿また楽し
寒水仙日溜まりでみる寺庭かな

前橋 相沢 富子

待春のつばやき木々と碧空と
寒林や何かに見られぬるやうな
寒林は縦に日差は横に射す

前橋 清水サヤ子

悴みてページめくりのもどかしさ
寒椿雑木林に凜と咲く
成人式遠い昔に思ひはせ

前橋 鈴木恵三郎

肩ふれて笑顔で睨む達磨市
金欄の御輿を据えて達磨焚く
火柱のとどろき立てるとんどやき

前橋 鈴木 幸江

老舗とて間口いっぱい注連を張る
初売りのチラシの嵩を虞れけり
重ね着の肌刺し徹す空つ風

前橋 鈴木 令女

風止んで元日の月くわうくわうと
いびつありあばたも浮かぶ柚子湯かな
誰も居ぬ部屋にしみこむ寒さあり

前橋 高草木君女

凍てに耐へ寂かに赤き冬薔薇
一人居の柚子の香滲みるまで長湯
命終る星は何れや寒の空

前橋 高橋テル女

五七五心の支え去年今年
初電話疎遠の友のはずむ声
年賀状米寿かたぶつ百めざし

昭 和 花岡 京子

どことなく手抜きだらけの年迎
恙無しあの人この人年賀状
雪雲に被はれてあて山憂ふ

前橋 鈴木 涼美

初明り無限の空を携へて
蒼穹に手薬煉ひいてある寒さ
湯煙にためらひ乍ら氷柱伸ぶ

渋川 山本 素竹

それとなくそれとなく鴨遠ざかる
二列目は日の当たたらざる寒牡丹
日当りて寒鯉の命入れ替る

前橋 伊藤 涼志

独り言藪にこぼして笹子かな
早梅の香り血流へと送る
仏界も俗界もなく春隣

以上

投句募集

土筆集は、あくまで皆様の作品の発表の場です。
日頃作った作品の中から、ご自分の好きな句を発
表してみたいかがでしょうか。

投句 三句 葉書、メール、ファックス
締切 毎月未まで 事務局

〒371-0811 前橋市朝倉町三一五一三十七

027-261-2297 Fax 027-261-2298

メール mukusi@clay-kotobuki.co.jp

またひとつトンネル越ゆる紅葉狩

無駄な言葉も無く、情景が手に取るように分かる句。自然な詠いぶりが快く響きます。

冬ざれや辻に傾く道祖神

言われてみると、道祖神の真直ぐのものは少ないかもしれませぬ。冬ざれの田舎の風景が伝わってきます。

電飾の綺羅に寒さを忘るほど

現代の風物詩でしょうか。高崎市にも、榛名湖にもそういった電飾のイベントがあると聞きます。新しい冬の光景ですね。

蠟梅の褒められる度賞はれて

いかにも蠟梅らしいと思えました。また、蠟梅を差し上げる方の人柄まで想像できて、ほのぼのとした気分させられます。

もう誰か割って仕舞ひし初氷

その年初めての氷。作者がそれを割ろうとするかは別として、目にしたとき残念ながらも誰かに割れていたと…初氷だから面白い。

見えぬものみつめる間に除夜の鐘

作者の立っている位置がおよそ想像でき、大晦日の夜の闇を感慨深く味わっている作者が想像できます。

ビルの中の空遥かなる神迎へ
ビルの中の空…だから面白いといえるでしょう。森の空では当たり前前。近代の景色を持ってきた新しさですね。

以上

メール句会

十二月分互選結果

互選結果

小町選

霜柱大地の皮を剥がしけり

霜柱で盛り上がった大地の痛々しき。強烈に表れています。

普通選

尖る風避けやうのなき冬野かな
手袋に別の自分を仕舞い込む

愛
みさほ

末摘花

特選

百歳に神の落葉を掃く仕事
神殿を清掃する使命感にお年ともに感心致しました。

空蝉

普通選

マイク持ちやつと歌えた年忘れ
浮寝鴨力ぬきつつ玉となる

美伊
小町

東原選

眉の月師走の空を和ませて
女の眉のような細く美しい月が心を和ませてくれる師走の夜の情景が目に見えんできます。

岳

普通選

「眉の月」が句を引き立たせています。

普通選

マイク持ちやつと歌えた年忘れ
初氷元気はつらつ日を返す

美伊
公徳

岳選

霜柱大地の皮を剥がしけり

公徳

霜柱の力強さが一気に伝わって来ます。

普通選

身を軽くして休息の枯木立
浮寝鴨力抜きつつ玉となる

空蝉
小町

特選

法則の無き氷紋や初氷
初氷の成り立ちの表現には感服致しました。

愛

普通選

語ること何もなくても息白し
身を軽くして休息の枯木立

みさほ
空蝉

特選

鳩もぐりもぐり大根根渉るなり
大根根の力強い流れを小さな鳩が潜りながらわたつてゆく様子がよくあらわれております。

未摘花

普通選

斑雪踏みつ散歩や鴉なく
灌木の後に眠る山静か

誠哉
かきむすめ

特選

浮寝鴨力抜きつつ玉となる
川池に囲まれた地に住まいしていますので、よくこんな景に心とませています。中7から下5お見事です。

小町

普通選

法則の無き氷紋や初氷
包丁研ぐことより始む年用意

愛
東原

誠哉選

切り貼りの障子に過ぎる母の影
儉しく生きた優しいお母さんの面影、又其の時代背景が懐かしく偲ばれます。

かきむすめ

普通選

尖る風避けやうのなき冬野かな
寒禽のジャンプに細枝優しかな

愛
小町

普通選

空蝉選

巢立ち跡くつきり見せて冬木立
冬木立の中に残された古巢に、未来へ羽ばたい

岳

特選

ていつた命たちの健全を祈る冬木立と作者の温かさを感じました。

普通選

尖る風避けやうのなき冬野かな
浮寝鴨力抜きつつ玉となる

美伊選

身を軽くして休息の枯木立

よい捉え方をしている

よいと思います。

普通選

手袋に別の自分を仕舞い込む
巢立ち跡くつきり見せて冬木立

愛選

身を軽くして休息の枯木立

すっきり葉を落した枯木立は春の芽吹きに備えて力を蓄えている準備期間

普通選

包丁研ぐことより始む年用意
巢立ち跡くつきり見せて枯木立

以上

藤の丘句会

平成二十二年 一月句会

一月 九日

互選 結果

伊藤 涼志選

何もかも固めてしまひ池の凍
一面の霜に一筋日の光

魂のゆるむ音して日向ぼこ

涸れ残る水底浅く蒼き空

野鳥等の営みの場所水涸れる

薄氷静かな湖面息ひそめ

顔面に張りつきしま凍る風

煌めいてはかなき命朝の霜

冬芽にも夢ふくります日恵み

初笑腹の底までほくしゆく

初氷日矢の温みに動かざる

志 帆

志 帆

霜弛み色取り戻す野路の草
着ふくれて尚も体をふくらます

受くる日を池一面の初氷

涸れ残る水は動かず時を待つ
密やかに薄氷張る山の池

とりどりの冬帽並ぶ日和かな

浮寝鳥日差し求めて日溜まりに
入れ替はる霜の輝き草の色

冬草の青さうち秘めさらされて

笹鳴に山静まれり青い空

昨夜のまま刻を閉ぢ込め初氷

云ひたきこと云へる仲なる初笑

霜枯の野に潤ひを小さき花

飯島加津枝選

特選

涸れ残り沈めしものの寂かなり

普通選

冬木の芽確かなもののありにけり
冬帽と心意気まで新調し

凍てつきし池に溶け込む笑ひ声

冬芽にも夢ふくります陽の恵み

一陣の風を味方に空冴える

入れ替る霜の輝き草の色

小田満義選

特選

昨夜のまま刻をとしこめ初氷

普通選

生命を封じこめたり霜柱
厳寒を味方に生きたる野鳥かな

初氷日矢の温みに動かざる

入れ替る霜の輝き草の色

初氷水尾が動かす日差中

霜深く深く沈めてをる大気

落合洋治選

特選

涸れ残る水は動かず時を待つ

普通選

涸れ残る山水頼る命かな
しつかりと冬芽育む山木立

まり子

さち子

満 義

加津枝

洋 治

和 子

よし子

薫

よし子

洋 治

富士子

敏 枝

さち子

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

敏 枝

文様も個性主張す初氷
冬芽にも夢ふくります陽の恵み

きらめいてはかなき命朝の霜

水仙の日差し含みて色温し

岸まり子選

特選

一面の霜に一筋日の光

普通選

氷下潜む命のあるらしく
一月の光明るき山小径

涸れ残る水底浅き蒼き空

顔面に張り付きしま凍てる風

あいまいな水の境目初氷

朝霜の溶けまひとする日の雫

小山さち子選

特選

霜深く深く沈めてをる大気

普通選

霜柱耳柔らかにきしむ音
冬帽と心意気まで新調し

力抜き霜に委ねてある野草

感性をとぎすましたる初句会

魂のゆるむ音して日向ぼこ

顔面に張り付きしま凍てる風

白石敏枝選

特選

濡れ色に霜の命の変身を

普通選

魂のゆるむ音して日向ぼこ
漣とせめぎ合つて初氷

乾きたる羽のきしみや寒鴉

鳥啼きて冴えし大気の真つ二つ

霜晴の光の雫撒き散らす

山水の地の温もりに涸れ残る

舟山力ウ子選

特選

冬帽と心意気まで新調し

普通選

言ひたき事言へる仲なる初笑ひ

満 義

和 子

富士子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

よし子

唯野 千代選

特選

水切りの飛沫尖つてゐる寒さ

普通選

水底の光を返す寒の川
殿は吾となりたる探梅行
水垢の乾く石ころ風牙ゆる
待春や石の口マンを語る岸
水辺にて若菜の緑目を奪ふ
凍雲に占ふ今日の一日を

涼志

利美子

涼志

秋野

秀子

静子

青山 麻子選

特選

探梅やひとまづ降ろす心の荷

普通選

探梅や開花はいつと空に問ふ
切り口に瘤に歴史や梅探る
大寒にめげずに競ふ空手の子
凜として日溜まり好み冬木の芽
新しき願ひを込めて梅ふむむ
冬薔薇けなげなピンク寺の庭

涼志

史子

涼志

和世

喜代子

和世

史子

小林喜代子選

特選

励まされ慰められて春を待つ

普通選

探梅や違ひの分かる陰日向
大寒にめげずに競ふ空手の子
素振りにも見せぬ悲哀や春近し
日差しにも溢るる期待梅探る
日の匂ひ羽にこもりて冬の蝶
一時の老いに至福の日向ぼこ

涼志

よしの

和世

涼志

涼志

公志

よしの

長光寺俳句会 一月例会

平成二二年一月二十九日

互選結果

伊藤 涼志選

梅一輪咲きて白雲動きけり

寄せて引く波楽しげに春近し

太陽の光もらひて福寿草

寒水仙日溜まりでみる寺庭かな

冬草に元気をもらふ己かな

冬空を眺めて一人深呼吸

凜として日溜まり好み冬木の芽

探梅の日輪とどめ蕾持つ

冬木立一幹づつの風の艶

着膨れて今年の行も満願に

新しき願ひを込めて梅ふむむ

探梅や小さな薔風に舞ふ

脈々と春待つ木々の鼓動かな

探梅や違ひの分かる陰日向

静かなる四温の寺領散策す

探梅や開花はいつと空に問ふ

冬木の芽しつかり光り集めをり

冬薔薇けなげなピンク寺の庭

鳥啼きてどこか春待つ気配かな

寒椿静かに開く時を待つ

大寒を過ぎてやはらぐ日の光

枯木とてかりそめの葉の二三枚

大寒の影法師連れ堂に座す

日の匂ひ羽にこもりて冬の蝶

公志

公志

冬木の芽しつかり光り集めをり
探梅や開花はいつと空に問ふ
一時の老いに至福の日向ぼこ
天命の歲月果てしそぞろ寒
寒行や見えざるものに促され
寒椿静かに開く時を待つ
柿沼よしの選

史子

史子

冬木立一幹づつの風の艶
春隣一步促す風の声
探梅やひとまづ降ろす心の荷
大寒を過ぎてやはらぐ日の光
冬木立一幹づつの風の艶
探梅や心安らく寺の庭
笠原 公子選

喜代子

喜代子

浮き雲の荒々しさや風牙ゆる
春隣一步促す風の声
凜として日溜まり好み冬木の芽
ひそやかに冬水仙の咲かんとす
太陽の光もらひて福寿草
脈々と春待つ木々の鼓動かな
冬木立一幹づつの風の艶
高橋 和枝選

涼志

喜代子

切りに口に瘤に歴史や梅探る
手を打てば影も手を打つ寒詣で
素振りにも見せぬ悲哀や春近し
垣根越し漏れる光に春近し
大寒の影法師連れ堂に座す
凜として日溜まり好み冬木の芽
地に低く羽音はあらず冬の蝶

公志

切りに口に瘤に歴史や梅探る
手を打てば影も手を打つ寒詣で
素振りにも見せぬ悲哀や春近し
垣根越し漏れる光に春近し
大寒の影法師連れ堂に座す
凜として日溜まり好み冬木の芽
地に低く羽音はあらず冬の蝶

公志

木犀俳句会 第十三回

平成二十二年一月例会
一月三十日

互選結果

伊藤 涼志選

突風に冬帽押さへ前屈み

早梅の枝の間に間に空青し

笹鳴を聞いて小藪に誘はれし

漣の揺らして通る浮き水

輝に亡き母の手を重ね見し

早梅を頭上に於いて浮く心

香り来る風に誘はれ梅探る

早梅の甘き香りに人を待つ

早梅の青空に映え奥ゆかし

早梅に二人分取る自由席

早梅の固き蕾に秘める香も

晩年の今の幸せ梅探る

蒼天を唯吾がものと日向ぼこ

稜線の空に弛みて春近し

日溜まりの土手に土竜や春近し

寒鯉の鉛をまよふ泳ぎかな

笹鳴や竹林深く姿無し

早咲きの梅の白さに振り返る

一切の虚飾を剥いで冬木立

早梅や花びら揺らし微笑みを

早梅の声一番の聞こえ来る

重なりて夢を見てある冬の草

竹林に笹鳴聞こゆ日和かな

早梅や甘き香りを放ちをり

浮寝鴨光揺らして空深し

冬木立眠る山里日溜まりに

探梅や視線ぶつかりあつてをり

早梅の幹に巻き付く鶯の色

岡野八千代選

紺碧の空に突き刺す冬木立

小田 満義選

独り言藪にこぼして笹子かな

蒼天を唯吾がものと日向ぼこ

塩出 柁子選
独り言藪にこぼして笹子かな
関口美智子選
突風に冬帽押さへ前屈み
相馬まさ子選

一切の虚飾を剥いで冬木立
長谷川 孝選
独り言藪にこぼして笹子かな
木下 薫選

特選
早梅の香り血流へと送る

普通選
早梅の眠る山肌色染めて
独り言藪にこぼして笹子かな
手も足も動く幸せ年忘れ

寒鯉の鉛をまよふ泳ぎかな
福寿草開きて蕾連れてをり

蒼天を唯吾がものと日向ぼこ
早梅の咲く日溜まりに我忘れ

日溜まりの土手に土竜や春近し
突風に冬帽押さへ前屈み

連句作品
歌仙「山ふところのレストラン」の巻

落ち葉舞う山ふところのレストラン
枝に止まりしオオコノハズク

知恵の輪を解きかねていて埒もなし
広告だけの週刊誌読む

満月を背に野良猫のゆうゆうと
懸崖仕立て菊師水やる

ウ
八口ウイン南瓜の面が捨てられて
恋占いの並ぶ路地裏

若作りレッドカードもぎりぎりに
不消化気味の衣々の朝

遼君の賞金王に励まされ
看板倒れ絵画教室

檀尻を曳く先々を照らす月

涼志
八千代

満義
涼志

涼志
柁子

涼志
美智子

満義
柁子

満義
八千代

八千代
八千代

規夫
若林

規夫
須藤

規夫
三井

規夫
山中

規夫
藤井

規夫
藤井

規夫
藤井

規夫
藤井

何処へ行く船頭多き民主丸
一二三とラジオ体操
宴にて絆深める花吹雪
海女の口笛波はおだやか

春ふかし歴史の旅は高遠へ
墨の濃淡古筆味わう
金銭のずれを感じる億単位
重いが取柄手びねりの鉢

代々の杜氏の技を守る神
大きな声で年の豆撒く
ヴィーナスの描く曲線の柔らかさ
帷の奥の白き蹠

息絶ゆるほどに抱きしめ魂消ゆる
税の引きあげ決める禁煙
窓に射す名月ビルに遮断され

鶯の絡まる築地の土塀
ナウ
松茸のどびん蒸ある祝膳

舶来品の好きだった祖父
セー又川河畔に塑像立ち尽くす
鮑かけかけ落語聴いてる

花盛り生きる力のもりもりと
遺跡の丘に遠足の列

平成二十一年十二月十三日 起首
平成二十二年一月二十四日 満尾

歌仙「山眠る」の巻
山眠る寢息の如く噴く浅間

自転車馳せる冬晴れの道
ITの企業研修参加して

一攫千金宝くじ買う
部屋中を覗き見してる大月夜

ウ
木犀香る庭の片隅

八口ウイン思い思いの被り物
ワインの酔いにスマートな嘘

合鍵で出入り気ままな夫の留守

佐静
佐静
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

規規
規規
規規
規規

